

## 既参加日本青年 インタビュー概要

### 凡例

NO.	参加事業名	氏名	職業・所属等 調査時点のもの
インタビュー 概要			

1	第4回 日本青年海外派遣 (東南アジア第2班)	大野 松茂	狭山市名誉市民、西武文理大学特命教授、埼玉県産業教育振興会会長、一般社団法人高麗 1300 理事長、埼玉県立川越総合高等学校明星会会長、元内閣官房副長官(安倍・福田内閣)、総務副大臣、自由民主党埼玉県支部連合会会長
---	-------------------------------	-------	---

青年団の先輩から勧められて応募。若い青年が海外に行くなど、ありえない時代に26歳で参加し、東南アジアなど9か国を訪問。カンボジアの農業関連視察の際に、日本の農業について話したところ、虫を殺すことにも抵抗を感じるような心優しい人たちだったが、ポル・ポト派によって大虐殺が行われ、国の信頼を失ってしまった。政治の安定がなければ、国の発展はないということを痛感し、政治の道を志すきっかけとなった。

1996年10月衆議院議員初当選した後、国会議員時代には、議員の有志とともに「カンボジアに小学校を贈る運動」を行い、カンボジアやラオスに学校を建設した。

2	第4回 国際青年育成交流 (ジョルダン)	須賀 亜衣子	エムスリー株式会社執行役員 人事グループ・グループリーダー
---	----------------------------	--------	-------------------------------

UC Berkeley 大学で Political Science(政治科学・経済学学士)を専攻し、中東へ行く機会を探していたところ、本事業の募集を見かけて応募。ヨルダンに到着してすぐの頃にはヨルダンでは「勤勉」が重視されていないと違和感を覚えたものの、様々な活動を通じ、豊かや人生の要素の優先順位は、国によって異なることを実感する。

多種多様な人が織りなす環境の中に身をおきたいと思うようになり、グローバル企業でキャリアを積んできた。これまでの様々な巡り合いがあつてこそ、今の自分があるとの思いから、現在、日本にいる外国人の永住権取得支援をしている。

3	第7回 国際青年育成交流(デンマーク)	久保田 崇	静岡県掛川市長
---	------------------------	-------	---------

地元の広報誌「広報かけがわ」に内閣府青年国際交流事業の募集が出ているのを見て応募。単なる海外旅行ではなく、研修として参加することで、得られるものが多そうだったのも理由の一つ。内閣府青年国際交流担当などを経て、2011年8月から2015年7月までの4年間岩手県陸前高田市で副市長を務める際には、海外からの支援窓口対応等を担い、地方自治体では、日本国旗と外国の国旗の扱いなど、国際的な慣習やルールについて知っている人が少ない場合があり、事業参加によって、国際感覚を身に付けられたのは大きかったと実感した。

現職でも、コロナ禍の中で、文化や習慣の違う外国の方々に新しいワクチンを打ってもらうためには、コミュニケーションの仕方など、様々な課題があることを日々痛感している。

4	第31回 日本・中国青年親善交流	伊藤 洋平	株式会社みんなのまちづくり代表取締役、一般社団法人まちの toolbox 代表理事、公益社団法人日本中国友好協会理事、認定 NPO 法人東京都日本中国友好協会理事長
---	---------------------	-------	--

新聞に内閣府事業の募集広告が出ているのを見たこと、先輩が内閣府の中国事業に参加したことをきっかけに

<p>応募。本事業に参加して、中国語はもちろんのこと中国とのコミュニケーション方法やマナーなどを身に着け、それまでほとんど縁のなかった中国との距離が近づき、奨学金を得て中国へ留学。その後、本事業の研修で講師やファシリテーターを務めたり、渉外(通訳)として事業に参加したりしている。2016年株式会社みんなのまちづくりを創業。生涯活躍のまち事業を中心に地方創生の取り組みを展開。2020年官民連携のまちづくり法人である一般社団法人まちのtoolboxを立ち上げ、代表理事就任。2022年現在、日中友好協会の理事と東京都日本中国友好協会理事長を務め、組織運営全般に関わっている。</p>			
5	第1回 東南アジア青年の船	池上 清子	長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科客員教授 公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長
<p>日本赤十字社の語学奉仕団からの推薦で参加。寄港地の一つであるタイのバンコクでホテルの前にある水たまりで路上生活者の子供たちが水遊びをしているのを見て、路上生活をせざるを得ないような社会から取り残されやすい人に対して何ができるかを考え、誰一人取り残されない社会を作っていくことが必要だと確信する。</p> <p>その後、世界から貧困をなくし、格差を是正するような仕事に就きたいと考え、国連難民高等弁務官事務所や国連人口基金等において、開発途上国の女性の健康推進、自立支援に携わってきた。</p>			
6	第2回 東南アジア青年の船	田中 治彦	上智大学名誉教授
<p>郵便友の会からの推薦で応募し、大学4年生の時に参加。事業に参加して、当時、欧米中心の世界にあって、「アジア」に目が見開かれ、世界が抱える問題(当時は南北問題、今ではSDGs)の実態を知ることができ、その解決に向けた教育を考えるようになった。その後、NPO法人開発教育協会で、長年開発教育・ESDの普及を行っている。開発教育は「国連 ESD の 10 年」で、持続可能な開発のための教育として発展した。近年、SDGsに関する著書として『SDGsと開発教育』など4冊を出版。市職員研修や教育委員会での研修を実施。</p>			
7	第8回 東南アジア青年の船	石川 幸子	立命館大学国際関係学部教授
<p>親族が赴任していたマレーシアを訪問し、東南アジア地域への関心が高まる。友人が「東南アジア青年の船」事業に参加したことをきっかけとして応募。本事業は「るつぼ体験」(自分の価値観・人生感が変わるような体験)であり、その後の人生の大きな基盤を形成する糧となり、大学院終了後、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) や JICA にて勤務する。キャビンの中で、良いことも悪いことも曝け出して折り合いをつけていく過程は、まさに「共感力」醸成の道場のように、他の人に対する「共感力」が必要とされる業務を遂行する面で大いに役立ってきた。</p>			
8	第8回 東南アジア青年の船	片山 和之	ペルー駐劄特命全権大使
<p>下宿の大家さんから、外交官になった学生が昔いたこと、在学中に青年交流事業に参加したという話を聞いたことをきっかけに本事業について知る。事業に参加して、日本を外から見つめ直す貴重な機会を得、その後の人生に続く人脈を構築できた。外交は国益を巡る国家と国家の関係ではあるが、外交に携わっているのは生身の人間であり、究極的には個々の外交官どうしの人間関係という側面もある。東ア船は、異文化交流を通じて日本の国益や国際社会における日本のあり方を考えるというその後の職業人生に決定的な影響を与えた。1983年に外務省に入職後、中国、アメリカ合衆国、マレーシア、ベルギー等で外交官を歴任。</p>			
9	第14回 東南アジア青年の船	岸田 直子 ハムダ なおこ (執筆名)	日本 UAE 文化センター代表 作家、翻訳家、エッセイスト
<p>学生時代は米国・メキシコに留学し、英国の科学調査探検隊オペレーションローリー等、様々な団体に活動。アジアのことを知らないと感じ、友人の紹介で20歳の時に事業参加。相手の立場を慮りながら、船内という新しい社会</p>			

<p>に新しい秩序を作り上げていくことを体験し、多くを学ぶ。第2回「世界青年の船」事業で通訳を務め、UAE 参加青年だった男性と結婚、UAE へ移住。自分が得難い経験をしたことへの恩返しは、次の世代にも同じようにしてあげることだと考え、2008年、「日本 UAE 文化センター」を自力で創設、14年間活動を継続。</p>			
10	第26回 東南アジア青年の船	田中 明人	株式会社イームインターナショナル代表取締役、 JTA TRADING CO., LTD. CEO 最高経営責任者、経済産業省「新輸出大国コンソーシアム事業」元専門家、農林水産省「輸出プロモーター事業」元専門家
<p>「アジア青年の船のつどい」に実行委員としてかかわったことをきっかけにして、本事業を知る。自分が LGBTQ であることを中学生の時に確信したものの、大学生活と社会に出てからの生き方について深く悩みながら参加。LGBTQ の参加青年が堂々と生きる姿を見て、「自分も生きていいんだ」と思えるようになる。タイ参加青年の紹介で、バンコク銀行に入行。その後タイ大使館勤務を経て、既参加青年とともに 2013 年に独立し起業。総合貿易商社を日本とタイの 2 か国で同時に設立。日本政府や地方自治体の海外展開プロジェクトにおいても力を発揮している。</p>			
11	第30回 東南アジア青年の船	山本 圭吾	在ドミニカ共和国 日本国大使館一等書記官
<p>当時の職場(税関)の先輩からの紹介で28歳の時に参加し、コミュニケーション能力の向上と歴史・国際社会に対する姿勢が変わったことを実感。事業参加後に、外務省に入植し、2007年から在ボリビア日本国大使館副領事、在モンゴル日本国大使館二等書記官等、を歴任。</p> <p>情報共有や意見交換はオンラインでも可能だが、異なる国の青年との共同生活や寄港地活動を通して身に付く肌感覚は対面式の交流でしか得られない。「船」は見栄えのするコンテンツであり、にっぽん丸という国名を冠した船による事業は、日本が ASEAN との交流を重視している姿勢を示すのに大きく寄与している。</p> <p>業務上、既参加青年と接することがあるが、参加の年は違っていても船という共通体験を通して一段上の協力的関係を築くことができている。</p>			
12	第35回 東南アジア青年の船	中谷 菜美	国連児童基金(ユニセフ)
<p>大学の先輩から勧められて参加。寄港地活動で障害を持つ子どもたちの施設を訪れたことが、子供の保護という分野に関心持つきっかけとなる。事業参加後、様々なボランティア活動を通じて、子どもたちが生まれ持った能力を最大限発揮できるような環境を作りたいと思うようになる。現在、UNICEF で自分が心から望んできた領域での仕事をしている。本事業により、若い世代が国際社会で活躍するためのリーダーシップ、ディスカッション力、異なる文化の人たちと働くための力を身につけることは、より多くの邦人職員が国際機関で活躍していくための戦略的な政策になりうると考えている。</p>			
13	第8回 世界青年の船	毛受 芳高	一般社団法人アスバシ代表理事、NPO 法人アスクネット 顧問・ファウンダー 他多数
<p>大学の先輩からの紹介で事業を知り、大学院で認知科学専攻時に参加。本事業は「主体的な挑戦・参画のための土壌」を与えてくれ、自分の能力を試す場となった。事業参加中、他の国の青年との成熟度を比べると、日本青年が未熟であると強く感じたことが、後に教育事業を始めた原体験につながる。下船後、1999年よりアスクネットを創設し、2001年にNPO法人化して学校と地域の間をつなぐ「教育コーディネーター」事業を立ち上げ、「キャリア教育」や「情報教育」などを学校等で展開。また2012年一般社団法人アスバシを立ち上げ、愛知県内の高校で高校生のインターンシップを普及させ、高卒就職の新しい形「早活プロキャリア」を推進している。</p>			
14	第11回 世界青年の船	柴田 昌和	アジア開発銀行広報官

<p>留学先のメキシコで知り合った友人の紹介で本事業を知り、国際社会が直面する課題について多角的に考える力を養いたいと思い、その翌年に応募。60 日間におよぶ航海は、豊かな心を育む深い学びがあり、自然の偉大さを実感させ、国際社会を生きる知恵を鍛えてくれる場所だった。小学校の卒業文集に「将来は国際機関で働きたい」と書いていたが、その夢が実現し、民間企業勤務を経て、UNDP、ユニセフ、ユネスコ、在ケニア日本大使館二等書記官、衆議院議員の秘書などを経て、2019 年 8 月から現職、国際畑を歩んできた。</p>			
15	第 11 回 世界青年の船	森本 友	世界銀行上級保健専門官 西部・中央アフリカ地域局
<p>大学時代に様々な国際交流活動やイベントに参加する中で内閣府の「世界青年の船」事業を知る。将来は国際的な仕事につきたいと漠然と思っていたため、大学を卒業する年に、一つの節目として、世界船に参加。事業参加後、日本貿易振興機構(ジェトロ)、ジュネーブの国際貿易センター勤務を経て、世界銀行入行。15 年ほど発展途上国の開発に携わり、社会の不平等や貧困を目の当たりにしてきたが、世界船への参加は、大きな社会問題に対し、「一個人として何ができるのか」を常に考える良い経験となってきた。また草の根から生まれる取組の大切さを知ったという意味でも、事業参加の経験が大きく影響している。</p>			
16	第 13 回 世界青年の船	田村 雅文	国際乾燥地農業研究センター (ICARDA) エジプト事務所
<p>本事業に参加した大学の先輩からの勧めにより 20 歳の時に応募。普段の生活とは極めて異なる環境での生活は大きな影響を与え、20 代の 10 年は(良い意味で)船上で崩された自身の価値観を再構築する時間となる。その後、青年海外協力隊としてシリアに赴任。2012 年に任意団体サダーカを立ち上げ、紛争を恐れヨルダンで避難生活を送るシリア人の家庭を訪問し、紛争停止を訴える。ICARDA(乾燥地農業研究センター)に転職。2020 年、世界の課題を自分の身近な問題とすることを目的としたオンラインの学校「ジブングト大学」を創設。</p>			
17	第 24 回 世界青年の船	渡部カンコロンゴ 清花	NPO 法人 WELgee
<p>高校生の時に市役所で募集ポスターを見て、大学 1 年生で応募。事業に参加して、休学している大学生たちに出会ったことは、その後のキャリアに影響を与える。大学を2年休学し、1年は現地 NGO での駐在員、翌年は国連開発計画(UNDP)の平和構築プロジェクトのインターンとしてバングラデシュに駐在。本事業は、自分の思考を形作ってくれた経験だった。2016 年、日本に逃れてきた難民の仲間たちと WELgee を設立。難民を社会変革のパートナーと見なし、経験・スキル・意欲を活かした伴走型の就労事業「JobCopass」などを運営。</p>			
18	第 30 回 (FY2017) 世界青年の船	長瀬 智寛	オルタナティブ・スクール あいち惟の森
<p>大学卒業後、フィジーの語学学校でスチューデントカウンセラーとして勤務。まだ知らない考え方や生き方をしている仲間に出会い、今後の暮らし方の参考にしたいと思い、本事業に参加。船上では、自分にとって価値があると思うことを「見える化」して積極的にアウトプットするという「自己肯定感」が高くなければできない活動が前提条件となっていた。自己肯定感が低くなりがちな日本の子供たちにも自分のしたいことを自分で選択して行動を起こせるようになってほしいと願い、オルタナティブ・スクールあいち惟の森にて担任スタッフを務めている。</p>			
19	第 8 回 青年社会活動コアリーダー 育成プログラム (高齢者分野、英国)	岩岡 ひとみ	特定非営利活動法人全国福祉理美容師養成協会 (NPO ふくりび)、 東京医科歯科大学修士課程 (医療政策学) 在学中
<p>高校時代に「世界青年の船」の事業に憧れていたものの、結婚と出産により高校を退学し、断念。その後、要介護高齢者・障害者・がん患者の外見支援をする NPO ふくりびを設立。29 歳の時に本事業を知る。NPO 活動の盛んなイギリスで、NPO と行政の連携や事業運営、高齢者介護の実際の現場などを視察。事業への参加は、中断したキャ</p>			

リアの再構築のきっかけとなっただけでなく、参加経験を軸とした他へのグローバルな活動へつながり、現在は、美容業界や医療・介護業界の人材育成の講師も務めている。

20	第 11 回 青年社会活動コアリーダー育成プログラム (青少年分野、ドイツ)	白石 祥和	特定非営利活動法人 With 優 代表
----	--	-------	------------------------

消防士合格を目指しながら、学校関連や企業等で働くうちに、学校や会社になじめない人たちがいることに気づき、2007年に「特定非営利活動法 Wit 優」を設立。内閣府からのメールで本事業を知る。ドイツで中間的な就労の場を立ち上げるためのヒントを得て、帰国後、一般就労を目指す若者の労働の場や、保護者や若者の相談を受けるための場といった居場所づくりに尽力する。利用者にも企画段階から運営に携わってもらい、職員3名とニート状態の若者7名で活動を始め、今では、行政サービスではなく、利用者を巻き込んだ「チーム支援」が活動の土台となっている。